

ちゅうこんひ の ぎたいしょう せきぞう 忠魂碑と乃木大将の石像

はちまんじんじゃ ちゅうこんひ うらがわ にちろせんそう
八幡神社に忠魂碑があります。裏側には、日露戦争・
まんしゅうじへん にちちゅうせんそう たいへいようせんそう せんし
満州事変・日中戦争・太平洋戦争で戦死した人の名
前が彫られています。



乃木大将の石像は、堀津小学校の東の門のところにあり
ましたが、今は忠魂碑と並んで立っています。

乃木大将：乃木希典（のぎまれすけ）^{めいじじだい} 明治時代の^{だいひょうてき} 代表的な^{ぐんじん} 軍人。

戦争のころの様子（太平洋戦争）

昭和16年12月8日、日本はアメリカ・イギリスなどとも戦争を始めま
した。堀津村にも毎日のようにたくさんの人に召集令状が届き、戦争に
いきました。八幡神社や小学校では、戦争に行く人を送る壮行式を行いま
した。村長・在郷軍人・青年団などのあいさつの後、出征兵士との別れ
の言葉、万歳三唱をして出須賀の木橋まで見送りました。出征兵士は、
西竹鼻駅から電車に乗り、岐阜市の陸軍68連隊・名古屋市の6連隊・呉市
の海兵団などに入りました。

戦死の知らせが来て、遺骨が帰ると、出須賀の橋まで迎えに出て、小学校
で合同慰霊祭をしました。

食べ物や着物がたりなくなりましたが、「欲しがりません、勝つまでは」
と言ってがんばりました。やがて、着る物や食料は配給になり、国が
決めた分だけしか買えませんでした。この辺は農家が多かったのでお米
も食べる事ができましたが、米以外の雑穀をたくさん混ぜてご飯を炊き
ました。

竹鼻の方から衣類を持ってさつまいもやじゃがいもなどの食料とかえ
てほしいと言う人が毎日やってきました。アメリカの爆撃機B29に分
からないように白壁を黒く塗ったり、電灯を黒いきれで包んだりしました。
爆撃をさけて、大阪や名古屋からたくさんの方が、堀津村に親戚をたよっ
て疎開してきました。

濃尾大震災の時の様子

1932年、濃尾大地震は根尾谷を震源地

として発生しました。このときできた
根尾谷断層は地表面に現れたものだけ

で全長80キロメートルに及びました。本巣市根尾には、最大で
垂直に6メートルのずれが生じました。垂直方向に50CMのず
れを生じた阪神・淡路大震災の断層（兵庫県北淡町）と比較すると
その規模の大きさが想像できます。

もっとも悲惨な被害を受けたのは、震源地の南に隣接し、人口の
集中していた岐阜・大垣をはじめとする都市やその周辺の町村
でした。これらの地域は家屋の多くが倒壊し、火災も発生し多数の
死傷者が出ました。中でも被害のもっとも大きかったのは岐阜市で
す。倒壊家屋（全・半壊）は、当時の岐阜市で3,742戸（全戸数の
62パーセント）にのぼり、当時の新聞は、「ギフが消えた」と書いた
ようです。

朝の6時30分過ぎといえはちょうど朝食時にあたり、家族の多く
が家の中にいた時間帯であり、そのため圧死者が出ました。しかも食
事時のため、あちこちから出火し、2,113戸（全戸数の35パーセン
ト）が焼失し、焼死者も出て、被害をいっそう大きくしました。

地震直後に鍛冶屋町に燃え広がった火は西北西の風にあおられ
て東南に燃え広がりました。その火は、市街地の大半を焼き尽くし、
翌日午前11時によりやく鎮火するというありさまでした。

加納町（岐阜市）では、半壊家屋を含めると全戸数の83.5パーセン
トが被害を受けるといふ壊滅的なものでありました。本巣郡、山県
郡、羽栗郡（羽島郡と羽島市の一部）、中島郡（羽島市）、各務郡（各
務原市）でも岐阜市同様多くの死傷者や家屋の被害を出しました。



えんくうふつ

円空仏について

江戸時代、生涯にわたって木製の仏像を約12万体制り続けた人物がいました。それが円空上人です。諸国を旅しながら、修行の一つとして、仏像を彫り続け、一生を終えたそうです。

円空は、1632年、美濃国（現在の岐阜県）に生まれました。長良川の洪水で、母を亡くすという悲劇に見舞われてそれがきっかけかは定かではありませんが、仏門に入り出家したとされています。

1665年、江戸幕府は「諸宗寺院法度」という法律をつくり、僧侶の活動は寺の中だけと限定されました。そんな時代にもかかわらず、円空はどの寺院にも所属せず、遊行僧となり、32歳で旅に出ました。新潟から船で北海道に渡り、干ばつや災害、病に苦しむ人々を救うた

め、念仏を唱えながら、仏像を彫り寺院に奉納したとされています。托鉢をしながら旅を続け、時には、世話になった民家に一宿一飯の恩義に報いるために掘った仏像が各地に残されています。

この羽島市上中町が円空の生誕地です。だから、羽島市のあちこちに円空仏（レプリカ）が飾られていますし、堀津小学校の児童玄関や来賓玄関に円空仏が飾られているのはそのためです。



二宮金次郎って知ってる？

どこの小学校にもあった二宮金次郎像。堀津小学校では、戦争前までは銅像（どうせいのぞう）でした。二宮金次郎は、栃木県で生まれました。正確には二宮尊徳と言い、江戸時代に生きた人です。なぜ、各地の小学校に像が建てられたのかについては、少年時代の金次郎の生き方が人間としての模範とされたからです。家庭の仕事を手伝いながら、寸暇を惜しんで読書したり、箱に砂を入れて棒で書いては消して文字を覚えたりして一生懸命勉強に励む姿がその頃の小学生のお手本となりました。今でも、工夫して勉強することはとても大事なことです。最近では、読書しながら歩くななんて危ない（歩きスマホを連想させる）とか、薪をかついでいる姿が時代にあっていないという理由で、だんだんなくなりつつあります。堀津小学校の児童玄関には、しっかりと残されています。二宮尊徳が唱えた有名な言葉に「積小為大」があります。「毎日毎日の小さな努力の積み重ねが大きな成果につながる」という意味だそう。小さな積み重ねがやがて大きな夢や目標につながっていくんですね。



ほつちよう むかしばなし
堀津町の昔話「みよのひきずり」

むかし みよいけ
昔、海用池には、「ひきず

り」という主がすんでおったそう

な。江戸時代、夕方のこと、海用

の徳右衛門が海用池のそばを

通り過ぎると、「ドブーン」と

いう音がした。海用池の方を見る

と、黒くて大きな竜のような

化け物が歩き回っておったそうだ。腰を抜かすほど、びっくりした

徳右衛門は、後ろも振り返らず、一目散に家へ逃げ帰ったと。そして

て、そのまま病気になる、何年か患って死んでしまったそうや。

それからというもの、「ひきずり」を見たもんは、みんな病気になるたりけがをしたりし恐れられていた。

しかし、あるとき、ものすごい強い風が吹きだし、真っ黒な雲が北の方から飛んできたそうや。その雲が、海用池の上まで来るとゆ

っくりとおりはじめ、池を見えんように包んでしまったそうや。気が

がつくと、黒雲が何かを包むようにゆっくりと上がり、北の方へ

飛んでいったと。黒雲の下からは竜のしっぽのようなものが出と

ったと。みんなは「おお、竜の昇天じゃ。竜神様が昇天なされ

た。」と言ってその光景を見送ったそうや。

海用池には、今でも竜の子どもがいてその子どもをつぶすとた

たりがあるそうや。

昔からこの地に暮らす人々は、川や池の恵みを生かして暮らし

てきました。恵みや命を大事にすることを教えてくれている民話

です。

